

School Education to Teach Life-Management as an Independent Person:
The Report about School Inspection of ESBZ in Germany

自立した人間として人生を生きるための学校教育
—ドイツESBZでの教育の視察報告—

中村 正人
伊藤 通子

自立した人間として人生を生きるための学校教育 —ドイツ ESBZ での教育の視察報告—

自然科学系 物理学教育部門 中村 正人
教育開発機構 伊藤 通子

1. はじめに

ESBZ(Evangelische Schule Berlin Zentrum)はドイツベルリンのプロテスタント系の私立中高一貫校である。ESBZの教育方針は国連アジェンダ2030を基盤の思想とし、21世紀の問題に対して責任を持って行動できる人を育てることにあり、様々な新しい教育を行っている。フレデリック・ラルー著『Teal組織—マネジメントの常識を覆す次世代型組織の出現—』(英治出版、2018)で学校組織として世界で唯一の事例として取り上げられ、世界的に有名になった。

2019年11月18日から22日にわたり、著者の一人を発起人とする8名のグループで、ESBZを中心としてベルリンの教育施設の視察と各所でのインタビューを行った。視察の中心としたESBZに関しては、在校生、教員、初代校長、卒業生、一般保護者、保護者らが運営する学校支援法人の役員という様々なステークホルダーにインタビューを行ったが、本報告では授業参観の報告と、案内をしてくれた在校生、教員、卒業生へのヒアリング結果に限定する。

2. ESBZの教育の特徴

2-1. 学校の理念

人道主義、人間中心が原則であり、同時に自分から他人へ、さらに地球全体にという思想がベースである。ESBZでの学習に不可欠なものにログブック(Logbuch)があり、毎日開くこのログブックに私たちの使命(Unser

Leitbild)として、学校の理念(Schulethos)(図1)、Agenda21前文(図2)、SDGs(図3)が載っている。

学校の理念(私たちの望んでいることと表記されている)には次の項目が挙げられている。

- すべての子供が、独自性を持ち、尊敬され、励まされ、求められること。
- 学校や課外の学習場所で、頭、心、手を使って人生に近い様々な学習機会を通じて才能を最大限に伸ばすことができること。
- 全ての児童と生徒が、小学校卒業後も、共同的グループで個々に適した方法で学習を続けられること。
- 誰もが歓迎される「学習の家」となり、あらゆる種類の才能を持つ子供や若者も、ハンディキャップを持つ子供や若者も、そして異なる文化を持つ子供や若者も受け入れられていると感じられ、21世紀の課題として、一緒に生きることを学べること。
- すべての子供と若者が責任を持って行動する勇気と喜びを育てること。
- 学校文化の中心的な要素は、学校と地域社会で仕事をすること。
- 生徒、保護者、教育者、コミュニティの人々が共同で学校の発展に責任を持つこと。
- そして協力することも批判することもできるような開かれた精神と相互信頼を必要とすること。



図1
私たちの使命 学校の理念

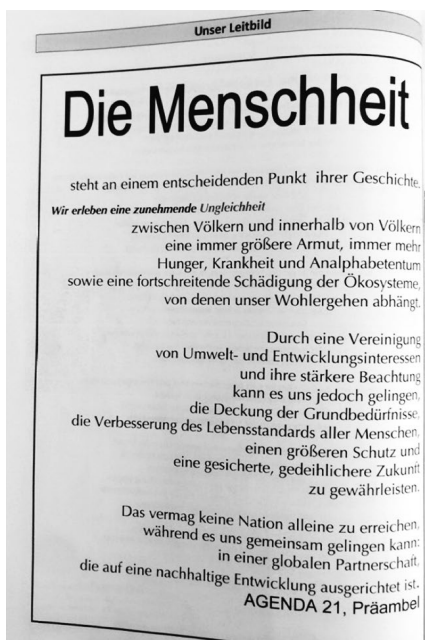


図2 私たちの使命 Agenda21



図3 私たちの使命 SDGs



図4 教室の様子

「授業」は気持ちを切り替えることから始まる。
絨毯の上の鐘が鳴らされると、生徒たちは2分間、目を閉じた。

などが書かれている。これらは、どの学校でも目にするような理念に思えるが、ESBZ では、世界的に注目される、その特徴的な教育方法と組織体制が理念の実現を支えており、単なるお題目になってはいなかった。

2-2. 基本の「授業」とLB (Lernbüro)

ESBZ で特徴的な授業は、LB (Lernbüro 英訳すれば LearningOffice) という自習時間のような授業であり、小学校 (ESBM) から中高 (ESBZ) まで設けられており、学年が進むにしたがって、時間割の中の割合が増えるシステムとなっている。著者らは7～9年生の視察をしたが、学習は3人以下のグループ単位が基本となっていた。異なる学年でグループを組むこともできる。国語、英語、数学、社会(歴史と政治と地理)という主要教科はすべてこの自習体制であるという。生徒は自分で自由に計画を立てて、独立して課題に向かう。LB では、その日に学校に来て何を学習するかを決めることも可能である。

教員は生徒の学びのプロセスのサポート役である。生徒が質問しても教えるのではなく問いかけやアドバイスをする。学習が進むに従い生徒から教員に積極的に質問する。実際、学習がどんどん進んでいる様子で、1回の学習時間90分の中で数回アドバイスを求めた生徒がいた。一方、おしゃべりしつつ課題に取り組む生徒達やパンを食べながらの生徒もいた。どんな学習のスタイルを取るか個々の権利が認められているのだ。図5は部屋にあった掲示である。「すべての教師には、邪魔されずに教える権利があります」、「す



図5 部屋にあった掲示

すべての生徒には、邪魔されずに学ぶ権利があります」、「これらの権利を尊重しない人は、それに対して責任を負わねばなりません」と書かれていた。

教員の授業中の仕事はアドバイスだけではない。生徒が自由にその時に何を学ぶか決められるということは、教員からすれば、生徒がその時間にどの部屋にいるかを把握しなくてはならないということになる。事実、その時間中に教員が部屋を出てチェックしに行っていた。日本の典型的な中高の教員の姿とは別の忙しさである。しかし、何故あのように生き生きとしているように見えたのだろうか？

当該学習の時間が終わると、生徒は課題の終了具合をログブックに記録し教員に報告し、教員はその場で一人一人チェックをする。それにより教員はその日の生徒の状況を把握する。このログブックは見開き2ページで1週間分である。そこには、課題達成だけではなく自分のプロジェクトの記録、「私の週間目標」、「今週の誇れること」、「教師との約束」などを中心に記録していく。それら全てを教員と保護者も共有し、「保護者への／からのメッセージ」なども書き込まれる。図6はログブックの記入説明のページである。図7は記入例である。説明の丁寧さは、この学校でのログブックの重要性を示している。

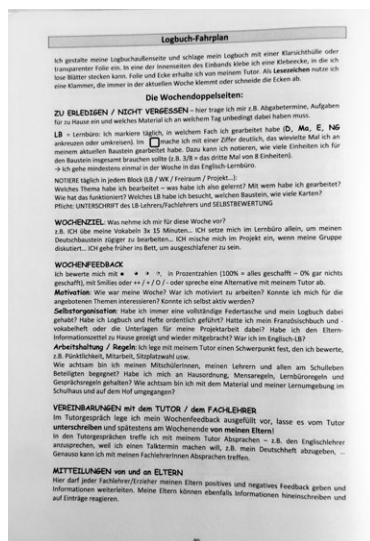


図6 ログブックの記入法

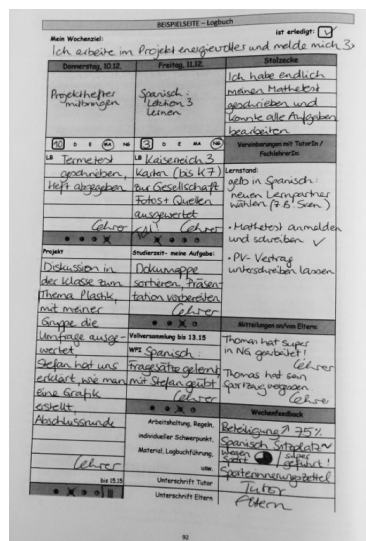


図7 ログブックの記入例

ESBZ の基本学習（授業）を生徒、卒業生、教員はどう評価しているのか。

今回の視察で、案内とインタビューに応じてくれた生徒2名の言葉を紹介する。このように書くと、この二人は学校代表の生徒と思われるだろうがそうではなく、人とコミュニケーションを取ることが苦手なため、「社会への責任」という名のプロジェクト型授業で「大人に教える」というプロジェクトを自ら立ち上げて、著者らの視察に生徒として参加しているとのことであった。二人とも ESBM（小学校）からの進学ではなく転校生なので、ESBZ に来る前には経験していなかった学び方である。前の学校では勉強が嫌いだった、ここに来て大好きになった、先生の信頼を壊したくないという気持ちが高まったことや、学ぶことに対する自由を与えられて自分で計画を立てて学んでいけることを高く評価していた。一人の生徒は環境問題に強い関心があり、前の学校（ギムナジウムという進学校）では環境のデモに参加したことで最低の成績を付けられた。ギムナジウムでは毎日テスト勉強ばかりだったと話し、ESBZ に来て自分が自分の学習に責任を持つことを学んだが、オーガナイズできなかつたらという不安は常にあるが、そういう時は先生と相談して助けてもらえると話した。

では、卒業生は、ESBZ での学習をどう評価しているのだろうか。

進学し教職課程を履修している卒業生2名（ベルリン自由大学生、フンボルト大学生）へのインタビューでは、ESBZ では自主的に勉強した、暗記や効率的な勉強法を教えてくれることはなかった、自分で勉強の仕方、学び方を発見した、と語ってくれた。

さらに、ESBZ の科学の教員である Meth 先生は、自分自身が学ぶことが好きで、それを教えるという方針の学校だから ESBZ に転職したという方であるが、生徒には生徒自身の内側から学びの動きがある、誰でも自分から学びたがっているのだと語った。そして、もし、生徒に好奇心が見られず、学ぼうとしないとしたら、学校が何か間違った働きかけをしているのだ、とも語った。

生徒、卒業生、教員へのヒアリングからわかったことは、生徒一人一人の内発的な学びの力への信頼のもとに、学びの方法もペースも自分に合ったものを自分で見つけさせていることである。基本学習がベースになり、ESBZ では、以降で述べる「プロジェクト」、「ラーニングエクスペディション」、

「プルザー」、「ラーク」という特徴ある授業によって、ダイナミックな学びが展開し大きく機能していた。

2-3. プロジェクトという授業

ESBZのプロジェクト授業には「責任」(7~10年生)と「挑戦」(8~10年生)がある。「責任」プロジェクトは最低1つを1年間継続するものである。その立ち上げは、生徒自身が自分でやりたいこと、やるべきことを考えることから始まる。学外者と関わるならば交渉した上で、教員に相談し許可を受けて立ち上げに至る。先の在校生二人がプロジェクト授業の一環として私たちに應對してくれたことは記した。他の例として「地域の美化活動を行う」や「生徒集会の企画と運営」、「難民とダンスする」などがあるという。

「挑戦」プロジェクトは、全員が150ユーロのみを持って3週間のベルリン以外の街に旅行に出るというものである。必然的に他人との交渉や触れ合いが生まれる。旅行計画も生徒が行う。現在、このプロジェクトは公立校にも広がっているという。ESBZの高等部では、ドイツ以外の国での挑戦プロジェクトも、希望者に対して実施している。

2-4. ラーニングエクスペディション (LEX) という授業

1週間にわたり授業がなく、自分で決めたことをその間に学ぶ。年に何回かあり、料理、スポーツ、日本語などなんでも良いというものであるが、この学び方の意味は何か。

普通、学校が「学ぶべきこと」を決め、生徒はそれに従う。結果として生徒は、自分は何を学ぶべきか、自分が何をしたいかを考える機会を奪われているということが起こる。

一方、教員は、生徒が何をしたいか、生徒の関心は何かを考えておらず、どんな才能があり、卒業後の希望は何かをわかっていないまま、教え込むことが起こるのだと、Meth先生は説明してくれた。

2-5. プルザー (PULSARE) という授業

1週間にわたった授業で、文理融合の教員チームが自分の専門を生かして学際的なテーマを準備して組み立てる授業である。実験やフィールドワーク

なども組み込まれ、宿泊を伴うものもある。ESBZ の学び方で1週間に1つのテーマを学ぶ。

図8はプルザーの掲示である。プルザーの例として天文学について聞いた。この時の教員チームは物理、宗教、歴史の3人の教員で、参加者は40人であった。昼休みに学校に集合し、午後、夕方に関連する「授業」がある。天体観測では学校を離れ、ユースホステルに泊まり、昼は本を読み、夜は寝袋と天体望遠鏡で観測したということであった。

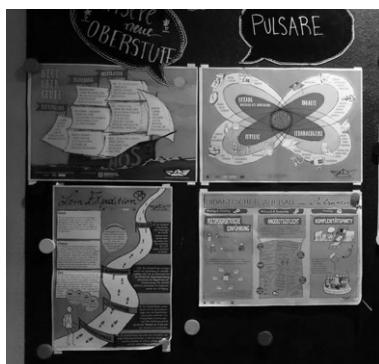


図8 プルザーの掲示

2-6. ラーク (LAK) という授業

生活と仕事のためのスキルワークショップである。学校で教えていない大事なことがあるという認識から生まれた。税の申告、保険等を学ぶ。図9はその掲示の一部である。学びを学校に止めないという表れであるが、ここに至るまでには何年もかかったということであった。



図9 LAK の掲示

2-7. 大学入学資格 (Abitur) のための授業

ドイツの厳しい大学入学資格 (Abitur) のために、ESBZ でも最後の2年間はそれまでの自由主体の授業とは変える。前述の卒業生2名へのインタビューでは、その授業のギャップに半年間は「駄目になった」こと、Abitur 対策授業はそれまでの「授業」とは合わないという批判を聞いた。ところが驚く事に ESBZ の Abitur の平均点は、表1に示すように、常にベルリン平均よりも上である。2019年は87人が大学入学資格を受けて全員が合格し、その内6人が最高レベルの成績1.0を取っている。

この結果の理由が最後の2年間の授業の効果なのか、それ以前の効果なのかと考えるのは意味がないだろう。そもそもこの結果で、ESBZ の思想と新しい実践の成果を捉えようとする事自体が、ESBZ に関わる人たちの望むところではないだろう。

表1 Abitur の平均点比較

年	ESBZ 平均	ベルリン平均
2019	2.07	未発表
2018	1.89	2.4
2017	1.95	2.4
2016	2.08	2.4
2015	2.07	2.3
2014	2.14	2.4

2-8. 卒業生に聞いた ESBZ で学んだこと

Meth 先生の言葉に、成績表の役割は生徒の順位づけであり、成績表の数字による評価は、その人間については何も語らない、学校での成果と人生での成果とは違う等があった。

ESBZ で学んだことを卒業生に聞いたところ、次のものがあった。

- 先生のみならず色々な人から学んだ。
- リラックスを学んだ。Abitur が駄目でも他にある。それで終わりではなく人生は続くことを学んだ。
- 自分は誰で、自分のやりたいことは何なのかが明確になった。システムに振り回されるのではなく、自分でシステムを制御することが大事と考える。

このように語る彼らは勿論、案内してくれた在校生も ESBZ に対する批判的な眼も持ち合わせていた。

卒業生の彼らに改善案を聞いたところ、その中には ESBZ の公立化があった。ESBZ は未来のモデルなのに、キリスト教の私立学校であるために排他的になってしまい、文化の多様性には対応できないからという理由である。そして同時に語ったことは、多くの種類の人がいる方が可能性は大きくなること、悪いところがあってもチャンスとして見て良くするし、良くできるということであった。

彼らはまた、新しい教育の試みは実験であり生徒は犠牲になる可能性があるから、計画段階から生徒と一緒に進むように、もっと民主化した方が良いと語った。本当に大切なのは透明性であり、どう話してどう決まったかがわかること、透明化でもっと介入できるのだと語った。その一方で、どうしても良いと考えている生徒も半分以上いると指摘し、「学校政治」という授業を普通の時間割の中に入れれば、もっと関与できると付け加えた。また、学校と家庭の間には契約があるのだから、教育に関する全てを 100% 見せることが必要だとも話し、自分自身が成長しながら、色々な面でよく考えていることが短時間の間でも伝わってきた。

彼ら二人に将来の教員としての抱負を聞いたところ、

- ・与えられたことに屈服し、ただ従順に従うのではなく、生徒が自立した考えを持ち、批判的であるように指導したい
- ・自分の手で自分の人生を拓けるように支援したい
- ・「君には君の目標がある」と語りかけ、最大の可能性に向けて、どんな時も生徒の将来を広げる先生になりたい

と答えてくれた。

おそらく、ESBZ には、今回インタビューに応じてくれた彼ら自身の言葉にあったように、自分の手で自分の人生を拓いていく卒業生が多いことだろう。

2-9. 保護者の関わり

ESBZ は ESBM (小学校) で学んだ自分たちの子供が同じ学び方で学べる学校を創ろうという保護者の思いからできた学校である。初代校長は保護者法人に招聘された。ESBM 創設以来の、保護者の我が子に対する教育への願いと組織形態が ESBZ を支えている。保護者が義務として行うボランティア活動と寄付が教育活動のベースとなっており、保護者ボランティアは常に何ができるかを自分で考え判断して行なっている。

3. ESBZ 視察から学んだこと、私たちが考えていくべきこと

本稿では、ESBZ の授業の視察と教員・在校生・卒業生へのインタビューに限って報告した。しかし視察全体・インタビュー全体から受けた印象が本報告に影響していることは言うまでもない。

ESBZ で教え、学び、巣立った人たちが、自分たちのしていることに確信と自信を抱いていることを感じた。ESBZ の特徴ある新しい教育が理想的な教育であると思っているからではない。改善すべき点を皆が、保護者も、それぞれの立場で考え、今よりも良くしていくことに自分が関わっている・関わられるという意識と運営システムがあった。冒頭で挙げたフレデリック・ラールの『Teal 組織—マネジメントの常識を覆す次世代型組織の出現—』でも「^{セルフマネジメント}自主運営する生徒、教師、保護者—^{ティール}進化型学校」として ESBZ が紹介されている。

Meth 先生という言葉にも、在校生の言葉にも、卒業生の言葉にも彼らが考える理想が現れていたと思えるし、ドイツの社会問題や制約がある中で、世界の課題に目が向いていた。この自分事として取り組む経験やそれによって培われる視野の広さに、自信の根拠があるのかもしれない。また、ESBZ は、結果としてティール組織と呼ばれるようになったが、進化し続ける組織運営の在り様にも、彼らの自信の根拠があるのかもしれない。

翻って、私たちは組織の改善に取り組み「完成」させると、あるいは「完成」されたものを学んだら、「完成」したものを変えずに、守りへと走りがちである。

私たちも日本と世界の現状を直視し、自分が関わるべきことを主体的に選

んで、高い理想を見失わずに「できる」ことから「小さく」とも「やってみる」覚悟が不可欠だと改めて考えた。

4. 終わりに

ESBZ の授業の視察と、教員、在校生、卒業生へのインタビューに限定して、ESBZ の特徴ある教育を報告した。

最後に今回の視察のメンバーである石井雅章氏、大塚明氏、嘉村賢州氏、嘉村こずえ氏、松崎由里氏、松田剛史氏、そして私たちの視察を実り多いものにするためのアテンド及び的確な通訳をしてくれた Nozomi Spennemann 氏に感謝したい。